

富大体研だより

2026—42号

令和8年7月発行

富山大学体研同窓会

自然の中でのびのびと

富山大学体育研究室同窓会

理事長 坪坂 亮 (30回生)



退職して7年目を迎えました。今は、富山市スポーツ協会の嘱託職員をしています。職場は山田村にある富山市野外教育活動センター、通称「富山市子どもの村」というところです。すぐ

そばに牛岳スキー場や日帰り温泉施設があります。富山市在住の会員は小学生か中学生時代に宿泊学習で訪れたことがあるでしょう。あるいは教員の方の中には引率の経験もあるのではないのでしょうか。

広大な敷地はほとんど傾斜地です。冬は雪深いため毎日のように除雪に追われます。60代後半には体力的に結構厳しい職場かもしれません。利用団体に対応するため登山のガイドをしたり、木工クラフト、野外炊飯など活動プログラムの指導もしたりします。もちろん施設の維持管理や環境保全も大事な業務になります。年長者だからと忖度されることもなく若いスタッフと同じように働いています（実際は足を引っ張っているかもしれませんが…）。しかし、充実した毎日を送っています。やめたいと思うことはありません、なぜでしょう。

ひとつに、じっとしているのが苦手でアウトドア派の性分に合っています。通勤には距離があり時間がかかりますが、天気の良い日、オートバイで行けば朝から楽しいツーリングです。坂や階段を歩くのは、運動不足解消につながります。体研の先輩の勧めで取得した自然解説員（ナチュラリスト）としての知識は、利用者とのコミュニケーションに役立ちます。もうひとつの大きな理由は、教員時代のように責任と時間に追われることなく何のプレッシャーもない中、毎日自然に囲まれて働けるということです。村内から一望できる富山平野と立山連峰の景観には、心が洗われます。また、季節の変化をこれほど敏感に感じながら働いたことはありません。仕事の合間に見晴らしのよいところで何も考えずぼうっとするのも気に入っています。

さてこんなすばらしいところですが、働いてみてわかった残念なことがあります。公立の青少年教育施設は、近年全国的に減少しています。特に国立施設は、ピーク時の半数以下に激減しているというデータがあ

ります。少子化、施設の老朽化、利用者減、オンライン化の普及、学校の働き方改革などが主な原因ということです。学校利用についても変化があります。コロナ禍後、多くの学校は1泊2日か日帰りという具合に滞在期間を短くしています。詰め込みの日程であわただしく過ごす子供たちを見ていると、「もっとのびのびとじっくり体験活動に取り組んでもよいのでは…」と思います。また、先生方も若手が多く、教職についてから宿泊学習の経験はほとんどないとか、初めて引率したなどという声をよくききます。

国が青少年教育施設を創設してから50年以上がたちます。当初の「勤労青年の社会性訓練や職業教育」という目的から「自然体験や集団宿泊生活を通じた、青少年の健全育成」へと歩み、指定管理者制度の導入や施設の独立行政法人化などの変遷を経てきました。今、少子化や情報化社会の進展により、施設のあり方が再び問われています。従来の体験活動に加え、福祉的・セーフティネット的な役割も強まっています。文科省は、「施設の機能強化や再編を進めつつ、地域、学校、企業と連携した体験活動の場を維持・確保していく方針」といいますが、具体的な動きは見えません。時流には抗えないのかもしれませんが、私は体験活動の場が失われ、子供の「体験格差」が大きくなるのではないかと気になって仕方がありません。

愚痴っぽくなってしまいました。私は、たまたま学生時代に培った体力、山歩きの経験、ナチュラリストの知識など、自分を生かせる場に出会いました。やりたいことが仕事になるのは幸せなことだと思います。終わりに会員の皆さん、子どもの村へ遊びに来てみませんか。山歩きをして源泉かけ流しのお風呂でじっくり湯につかる、命の洗濯になるかもしれません。



宿泊棟と富山平野と青空と

地域スポーツコースの最後の10年間の研究を振り返って

教育学部 准教授 福島 洋樹

富山大学人間発達科学部地域スポーツコースでは、この10年間にどのような研究が行われてきたのでしょうか。今回、2015年（第43巻）から最後となる2024年（第52巻）までの「特別研究・修士論文報告集」に掲載された地域スポーツ関係の題目269件をもとに、研究の流れをたどってみました。題目を一つひとつ眺めていくと、その時々々の学生の関心や、時代の変化に応じた研究の広がりが感じられ、とても興味深いものがありました。

まず、全体を通して目立っていたのは、競技技術や動作分析に関する研究です。とくにバスケットボールに関する題目は多く、シュートやパス、ゲーム分析などを扱った研究が数多く見られました。そのほかにも、バレーボール、野球、体操、歩行など、実技指導や動きの改善にかかわる研究が継続的に行われてきたことが分かります。地域スポーツコースらしく、現場に根ざした実践的な研究が大切にされてきた様子が、こうした題目からよく伝わってきます。

一方で、この10年を少し大きく眺めてみると、研究のテーマは少しずつ広がってきたように思われます。2015年から2019年ごろまでは、競技力向上や技能習得、部活動やクラブ活動に関する研究が中心でしたが、2020年以降になると、地域スポーツやスポーツマネジメントに関わる題目が目立つようになってきました。たとえば、部活動の地域移行を扱った研究、スポーツイベント参加後の再訪行動に注目した研究、プロクラブの観戦促進やSNS活用に関する研究などです。スポーツを「する」に加えて、「支える」「広げる」「地域につなぐ」といった視点が強まってきたことがうかがえます。

また、近年は教育や発達支援に関わる研究も印象に残ります。幼児期の親子体操、学校体育、健康教育の動画教材、子どもの社会性に関する研究など、子どもの育ちや学びに寄り添う題目が増えてきました。2023年には、幼児期のアタッチメント形成を促す親子体操

プログラムの開発に関する研究があり、2024年には、特別支援学校の児童生徒の興味・関心を引き出す健康教育の動画作成に関する研究や、「固定遊具」が子どもの社会性に及ぼす影響を扱う研究も見られました。こうした題目からは、地域スポーツコースの研究が、競技技術の向上だけでなく、教育的な支援や教材づくりへも広がっていることが感じられます。

さらに、健康や生活習慣に関する研究も、この10年間を通して着実に続いてきたテーマの一つです。大学生や運動部員の健康状態、食事、栄養、睡眠、気分状態などに目を向けた題目は、件数としては突出して多いわけではありませんが、スポーツを支える大切な土台として位置づけられてきたように思われます。とくに近年は、健康そのものを正面から扱う研究も見られ、競技力の向上と健康づくりの両立を考える視点が、より大切にされてきたことが分かります。

このように振り返ってみると、地域スポーツコースの最後の10年間の研究は、競技技術や動作分析をしっかりと土台にしながらも、地域スポーツ、スポーツマネジメント、教育・発達支援、健康づくりへと、少しずつその幅を広げてきたといえそうです。そこには、スポーツをめぐる社会の変化に応じて、研究の関心がより多面的に、そしてより実践的に広がってきた姿が映し出されています。

研究題目を通してこの10年をたどってみると、地域スポーツコースが大切にしてきたものが、あらためて見えてきます。競技の力を高めること、地域とつながること、人を育てること、そして健康を支えること。そうしたさまざまな視点が積み重なってきたことこそ、この10年間の大きな特色だったのではないのでしょうか。最後の10年を振り返ることは、これまでの歩みを確かめるとともに、これからの体育・スポーツ研究の広がりを考えるうえでも、意味のあることのように感じられます。

地域と大学の未来をつなぐ「T.A.F.」(タフ)の挑戦



川口 宗治 (44回生)

体研を卒業してから、ちょうど30年が経ちました。振り返れば、学生時代に体研で学び、アメリカンフットボール部で仲間と過ごした経験は、今の私の人生や仕事の土台になっています。勝つ喜びも、負ける悔しさも、仲間と目標に向かって努力する大切さも、すべて体研とアメフト部が教えてくれました。

現在私は、相続コンサルティング事業を経営する傍ら、富山大学アメリカンフットボール部FIREBULLSのGM(ゼネラルマネージャー)として活動しています。その中で今、本気で取り組んでいるのが「株式会社T.A.F.(タフ)」という、富山大学の体育会系クラブを支援する会社の設立構想です。

近年、富山大学の多くの運動部が部員不足や資金不足などの課題を抱えています。一方で、地域企業は優秀な若者との接点を求めています。私は富山大学の体育会クラブを起点に「学生」「地元企業」「地域社会」をつなぐ新しい仕組みを作りたいと考えています。

T.A.F.が目指すのは、単なるスポーツ支援団体ではありません。企業が学生を応援し、学生は競技や地域活

動を通じて成長し、その成果を地域へ還元する。そして卒業後も地域とのつながりを持ち続ける。富山に縁のある若者が富山で生きる選択をする。そんな好循環を生み出すプラットフォームです。私はこれを「令和版の産官学連携モデル」だと考えています。まずはアメフト部FIREBULLSから始めますが、将来的には他の体育会系クラブにも展開し、富山大学全体の学生支援や地域連携の強化につなげたいと思っています。大学の教員の皆様のお力添えをいただくべく、佐伯先生とは日々情報交換をさせていただいています。卒業から30年を経た今でも、こうして母校に関わり恩返しできることを嬉しく思います。

体研で学んだ挑戦する精神を胸に、これからも地域と大学の未来をつなぐ活動に取り組んでいきたいと思っています。



「人」は財産

大崎 紳矢 (58回生)

富山大学体育研究室を卒業してから今日まで、本当に多くの人との出会いに支えられてきました。今振り返ると、自分にとって一番の財産は「人」だと感じています。現在は3×3(三人制バスケットボール)のプロ選手として活動しながら、建築・デザインの仕事やスポーツイベントの企画・運営にも携わっています。どの活動も、人とのつながりがあってこそ成り立つものです。

私は19歳のとき、一度大学を休学し、プロバスケット

ボール選手を目指しました。当時のbjリーグで契約を勝ち取ることができましたが、半年で契約解除となり、大学へ戻ることになりました。しかし、その挫折があったからこそ、スポーツの持つ力を強く感じるようになりました。子どもたちが選手に憧れて目を輝かせる姿や、地域の企業や人々が一つのチームを応援する姿を見るたびに、スポーツには人と人をつなぎ、地域を元気にする力があると感じています。だからこそ今も現役にこだわり、競技を続けています。また、建

築やデザインの仕事も同じです。お客様や職人さん、協力会社の皆さまなど、多くの人が関わることで一つの形が生まれます。仕事とは単にモノをつくることなく、人と人をつなぐことだと思っています。

体研時代を振り返ると、授業や研究はもちろんですが、仲間たちと過ごした時間が今でも大きな財産です。当時の経験や出会いは、社会に出た今も自分を支えてくれています。これからもスポーツや仕事を通じて地域に貢献し、人と人をつなぐ活動を続けていきたいと思っています。そして、体研で学んだ「挑戦する気持ち」と「仲間を大切にする心」を忘れず、一步ずつ前へ進んでいきます。

最後になりますが、体研で出会った先生方や仲間たちに心から感謝申し上げます。「人との出会いが人生を

つくる」この言葉を胸に、これからも一つひとつのご縁を大切にしていきます。もし「面白そうな人だな」と思っていたら、ぜひSNSものぞいてみてください。スポーツや仕事、日々の挑戦を発信しています。



挑 戦

中山 和哉 (64回生)

私は2015年に体研を卒業後、富山県で保健体育科教員として9年間勤務しました。野球部の顧問として高校生と本気で向き合い、ともに悩んだ日々は、苦しくも楽しい時間でした。勝敗だけでなく、努力を積み重ねることの尊さを生徒たちとともに学んだ経験は、今の生き方の礎になっています。

教員生活の中で出会ったのが、トライアスロンでした。最初は趣味の延長として始めた競技でしたが、スイム・バイク・ランすべてに付き合い、自分の限界を少しずつ超えていく感覚に、私は強く心を動かされました。



競技を続けるために、毎朝4時に起きてトレーニングの時間を捻出する生活を積み重ねてきました。仕事との両立に苦しみ、思うようにいかず、何度も自分に問いかけることもありましたが、それでも、困難な道だか

らこそ挑戦する価値があり、その積み重ねの先にこそ自分の成長があると信じてきました。競技を続ける中で、ロングディスタンスの年代別日本代表として世界を目指すようになり、「もっと本気で挑戦したい」という思いは、次第に揺るぎない決意へと変わっていきました。そして、競技と仕事をより高い次元で両立させるために転職を決意し、現在は株式会社ゴールドウインでフルタイム勤務をしながら、競技生活を続けています。2025年にはスペインで開催された世界選手権に出場し、年代別4位入賞を果たしました。表彰台に一步届きませんでしたが、世界の舞台で味わった悔しさが世界の頂点に近づきたいという思いをさらに強くしてくれました。2026年11月には、UAE・アブダビで世界選手権への出場が内定しています。次に目指すのは、年代別優勝です。

教員として生徒たちと真剣に向き合った日々も、競技者として限界に挑み続ける今も、根底にあるのは「挑戦こそ、人を成長させる。人生を豊かにする。」という信念です。体研で学んだ日々を原点に、これからも困難な道にこそ価値を見だし、挑戦を続けていきたいと思っています。

挑戦し続ける力、子どもから得た学び

富山大学教育学部共同教員養成課程

尾近 宝

教育学部に入学し、「先生」という立場から物事を考えるようになりました。高校生までは生徒として先生方に指導していただいていたのですが、大学生となった今は、学生でありながら教師を目指す者として日々を過ごしています。先生とは、授業を行うだけでなく、子どもと向き合い、一人ひとりの個性に応じた声掛けや支援を行う存在であると思います。また、学級づくりや安全指導、給食指導など、これまで児童生徒としては見えていなかった多くの教育活動が学校にはあることに気付きました。

教育学部での学びは、その一つひとつが非常に重要であると感じています。私は、授業で得た知識をそのままにするのではなく、学校体験活動やふれあい体験活動、教育実習を通してアウトプットすることを大切にしてきました。実際の現場で活かすことで、学びは初めて自分の力になると感じました。

子どもたちと関わる中で、教師の関わり方によって子どもの姿は大きく変わること気付きました。一人ひとりを理解し、話を丁寧に聞き、「やりたい」「やってみたい」という気持ちに寄り添いながら一緒に考えること。さらに、肯定的な声掛けや適切な支援を行うことで、子どもたちは自ら関わろうとし、自分の思いを伝えようとするようになること。また、指導に対しても自分事として捉える姿が見られるようになる。全体への声掛けだけでなく、一人ひとりに向き合うこと、そして多様な視点から子ども理解を行うことが、教師にとって欠かせない力であると感じました。

教育実習では、模擬授業とは異なり、子どもたちの反応の予測が難しく、指導案通りに進まないことを実感しました。子どもたちの発言には想像を超えるものがあり、どのように受け止め、次につなげるかが求められました。伝え方や言葉の工夫、発問の仕方一つで、「わかった」「できた」につながるかどうかが大きく変わります。様々な活動を通して学校現場を見てきたつもりでも、実際に自分が教師として立つと、うまくいかないことや分からないことが多く、自分の未熟さを

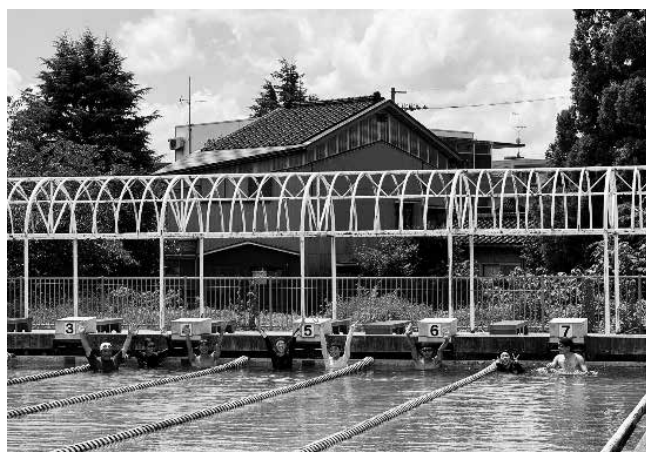
痛感しました。

日常生活の中でも、「この経験は授業で活かせるのではないか」「導入で使ったら面白いのではないか」と考えることが増えました。教員を目指す日々は、楽しさと不安が入り混じっていますが、自分がどのような姿で子どもたちの前に立ちたいのかを考える時間は、とても充実していると感じています。

私が子どもたちに伝えたいことは、「挑戦することの大切さ」です。初めからできないと決めつけるのではなく、「やってみよう」と一歩踏み出すことを大切にしたいです。失敗は恥ずかしいことではなく、次につながる大切な経験であり、自分を成長させるための一歩であると考えます。

一方で、自分自身を振り返ると、挑戦することを恐れたり、失敗を避けたりする場面が増えてきたと感じました。新しいことに踏み出さず、変化を求めない選択をしていたことにも気付きました。だからこそ、挑戦することの大切さを伝えるためには、まず自分自身が挑戦し続ける存在でなければならないと考えます。

これからは、小さなことでも挑戦を楽しむ姿勢を大切にし、自分自身が学び続ける存在でありたいです。そして、子どもたち一人ひとりの可能性を引き出し、「やってみたい」という気持ちを大切にできるよう支えていきます。学び続けること、挑戦し続けることを忘れず、子どもたちと共に成長し続ける教員を目指します。



あのことろ、そして これから

坂本 吾郎 (36回生)

自分の体研での一番の思い出は、冬のクロスカントリースキーの実習です。

初心者の自分にとって、練習は過酷なものでした。一生懸命滑ろうとしてもスキーが思うように前へ進みませんでした。その横で、上級班の仲間たちがスムーズに滑っているのを見て、自分の情けない状況を初日から実感させられました。実習が進み、繰り返し練習をするうちに少しずつスキーが前に進むようになりました。わずかなレベルアップもとてもうれしかったことを覚えています。実習のまとめのタイムレースも、マラソンで鍛えた心肺能力が味方してくれたのか、自分としては、満足できる結果になりました。先生方や仲間の声かけと温かい支えのおかげで、最終日まで無事に活動することができました。

この話には、続きがあります。実習のタイムレースの結果から、県のクロスカントリースキー大会に出ることになってしまいました。スタートして登り斜面は、持ち前の心肺機能でがんばれました。致命的だったのは下り坂でした。技能不足から下り坂の下でいつも転

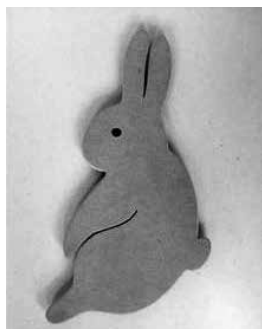
び、下りのスピードを生かすことができませんでした。結果的に大会の最終ゴール者になってしまいました。大会関係者の方々には温かい声援ばかりでなく、ゴール付近まで一緒に歩いていただき、つらいレースでしたが、温かい気持ちで終われたよい経験でした。今年から、定年延長が始まり、小学校の教員も残り3年間となりました。目の前の子供たちが笑顔で成長できるよう、一緒に歩み、伴走しながら支援していきたいと思います。

私生活では、30代後半から野球の審判に取り組んでいます。高校野球の審判は、還暦を迎えたので定年退職となりました。高校野球の審判で一番の思い出は、2016年の春の北信越高校野球大会に富山県代表の審判として新潟県に派遣されたことです。敦賀気比高校（福井）や小松大谷高校（石川）等有名な校の試合でジャッジしたことが、一生の宝物です。現在は、来年富山県で開催される一般軟式野球の全国大会天皇杯で、審判として球場に立てるように日々精進しています。



柔らかい思考を育てよう 「発想を変えて」

竹林 浩樹 (36回生)



ここに写真が一枚あります。みなさん、何に見えますか。多くのみなさんは、「うさぎ」と答えるでしょう。では、この体研だよりを時計回りに90度回

転させてみてください。今度は何に見えますか。今度は「アヒル」と答える方がいるかもしれませんね。人によっては、「カモノハシ」に見える方がいるかもしれません。これは、世界一受けたい授業等で有名な数学者 秋山 仁 先生の教材です。

このように全く同じ物でも、見方や発想を変えることで、別の物に見えたり、違う考え方になったりすることがしばしばあります。机の上に置いた十円玉も、真上から見ると「円」に見えますが、真横から見ると「長方形」に見えます。本来の姿は「円柱」ですが。また、嫌な仕事をしなければいけない状況があるとします。私は、こんなとき、「スキルアップにつなげよう」「みんなを驚かすチャンスがやってきた」と前向きに受け止めるようにしています。心に火がつき、モチベーションが上がるのです。

私たちは同じ物に対して、いつも同じ見方や考え方をしているのかもしれませんが。同じ見方や同じ考え方をしているということは、いつも同じ角度や視点から物を見ていることに他ならないのでしょうか。すると、いつも同じ部分が死角になって、目に入っていないのではないのでしょうか。

二刀流で大活躍し、メジャーリーグで4度のMVPを受賞している大谷翔平選手は、試合では緊張する分だけ、「今日の試合ではどのような発見や成長があるのか」とプラス要素をイメージして、「発想を変えて」臨むそうです。

努力をしてもなかなかうまくいかないことがあります。そんな時、見方や発想を変えてみることで新たな突破口が開けるかもしれません。還暦を迎え、教職の道を退いた私も、柔軟な思考やプラス思考を大切に、あのことろの水泳実習や登山実習、スキー実習等で培った体研魂と仲間を思いやる心を胸に、これからの人生を新しい視点で楽しみながら歩んでいきたいと思っています。



「素敵な仲間との絆」



今年の三月末をもって、三十八年間の教員生活に無事ピリオドを打つことができました。

私の体育研究室での思い出は、やはり仲間と共に汗を流した様々な実習です。遠泳実習、登山実習、スキー実習等どれもディープな思い出です。ただ、そんな数多くの思い出の中で、なぜか忘れられないどうでもいいような思い出も沢山あります。例えば飲み会の場でT君からマヨネーズを沢山食べさせてもらって顔中にもご馳走になったこと等です。（このご時世なのでこのような表現ですべてをお察しください）しかし、今思うとこのような日常のふとした場面が、私にとってはなぜか忘れられない懐かしい思い出となっています。

富川 貴徳（36回生）

さて、卒業後の私の教員生活を今振り返ってみるとかなりドラマチックなものだったように思います。立山町でスタートした教員生活ですが、役職としては体育主任十年、生徒指導主事十一年、そして派遣スポーツ主事として魚津市教育委員会に勤務し、2000年国体



と生涯スポーツの仕事を兼務しました。また、教頭として魚津市立村木小学校の閉校と統合の仕事に携わり、その後、県教育委員会生涯学習・文化財室で三年間勤務。青少年施設の管理運営に関わる業務や議会対応担当等、行政プロフェッショナルの県庁職員の方々から行政の仕事の仕方を叩き込まれました。その後、学校現場には戻りましたが精神的にお休みが必要となり、教育事務所に異動してから長期間の休職も経験しました。

最後の一年間は富山県教育の将来を担う優秀な指導主事の成長する姿を見ながら勤務し、安心して教員生活にピリオドを打つことができました。

苦しいことや辛いことも多々ありましたが、その時に一番の支えになったのが、富山県教育のために尽力する体育研究室の同期や先輩・後輩の皆様方の存在でした。この素敵な仲間との絆は、私の第二の人生においても大切な宝物となることでしょう。

思い出の数々

網　三枝子（旧姓　藤井）（36回生）

最近、テレビの歌番組で、昭和歌謡曲を耳にすることが多い。曲を聴くと、思い出がよみがえり、懐かしさがこみ上げてくる。登山実習中、その時に流行っていた「翼の折れたエンジェル」を「さあてい〜ん…」と熱唱しながら歩いた登山道。「大声で歌ったら、他の登山者の迷惑だ」と諭されたこともあった。あの頃のスキー実習では、リフトの上で横殴りの雪に打たれながら、流れてくる「ロマンスの神様」を口ずさんでいたものだ。

私の大学生活は、体育研究室での思い出でいっぱいである。

ただひたすら走り、どんどん置いていかれた「陸上」の授業。「器械運動」では、目の前に設置された高鉄棒にぶら下がることすらできず、落ち込んだ。「遠泳実習」では、勇んで泳ぎ始めたものの、泳ぎながら〇〇することができず、ボートにつながった。「スキー実習1」では、初めてのクロカンに挑んだのに、1年3人娘そ

ろっていただいたF評価。出るわ出るわ黒歴史。(笑)しかし、どれもこれも今では大切な思い出だ。同級生はもちろん、先輩・後輩みんな仲がよかった。おそろいのジャージは奇抜な色だったが、大学構内を歩くのも平気だった。

そして、末筆ではあるが、経験の一つ一つは、体育研究室で温かく、時に厳しくご指導くださった先生方のおかげであることは言うまでもない。改めて感謝の気持ちでいっぱいである。

昨年度末をもって役職定年を迎え、現在は新しい赴任地で、また小学校の子供たちと向き合っている。歳は重ねたが、体研で得た「熱魂」は、今も自分の中に確かに流れている。

60歳の節目にあたり、あの頃の思い出が、今の私を支えてくれていることを改めて感じている。これからも、体研で育んだ「熱魂」を胸に、日々を歩んでいきたい。



スキー実習…「薬師の湯」の宿の前



遠泳実習…氷見中田の宿内

令和6年度 総会

令和7年8月9日(土) とやま自遊館



会計報告

令和6年度 決算報告

I 一般会計

収 入	△収入減		単位:円	
項 目	予 算 額	決算額	比較増減	備 考
前年度繰越金	303,248	303,248	0	
年 会 費	270,000	273,000	3,000	3,000円×91口=273,000
雑 収 入	16,752	22,052	5,300	利子及び総会懇親会余剰金
合 計	590,000	598,300	8,300	

支 出	△前年度比減		単位:円	
項 目	予 算 額	決算額	比較増減	備 考
会 誌 発 行	90,000	45,573	44,427	体研だより41号
通 信 費	300,000	211,672	88,328	令和5年度関係通信費 郵送費 112,982 令和6年度関係通信費 はがき等 98,690
会 議 費	50,000	35,095	14,905	理事会費
事 務 費	10,000	3,957	6,043	インク等
総会準備助成	50,000	50,000	0	R7.8.9総会担当地区へ
学生研修等助成	40,000	40,000	0	富山大学体育研究会へ
懇親会助成	0	5,000	△ 5,000	第30期生へ
予 備 費	50,000	40,135	9,865	慶弔費
合 計	590,000	431,432	158,568	

収支差引残高：598,300 - 431,432 = 166,868円
166,868円は次年度へ繰り越します。

II 特別会計 604,034円

604,034円は次年度へ繰り越します。

令和7年度 予算（案）

I 一般会計

収 入	△収入減		単位:円	
項 目	R7予算額	R6決算額	比較増減	備 考
前年度繰越金	166,868	166,868	0	
年 会 費	270,000	273,000	△ 3,000	3,000×90口
雑 収 入	13,132	22,052	△ 8,920	
合 計	450,000	461,920	△ 11,920	

支 出	△前年度比減		単位:円	
項 目	R7予算額	R6決算額	比較増減	備 考
会 誌	50,000	45,573	4,427	令和7年度42号印刷費
通 信 費	140,000	211,672	△ 71,672	出欠はがき 体研だより郵送費 等
会 議 費	40,000	35,095	4,905	会誌編集会議 総会準備会議・理事会
事 務 費	5,000	3,957	1,043	インク等
総会準備助成	50,000	50,000	0	R8.8月総会担当 富山地区へ
学生研修等助成	40,000	40,000	0	富山大学体育研究室へ
懇親会助成	10,000	5,000	5,000	令和6年度は第30期生へ
HP作成準備費	70,000		70,000	ホームページ作成等依頼費等
予 備 費	45,000	40,135	4,865	慶弔費
合 計	450,000	431,432	18,568	

II 特別会計 604,034円

編集後記

DXが叫ばれ、世の中は大きく変化しました。この急激な変化に少々戸惑っています。私が働く学校現場でも生成AIの使用が認められました。ガイドラインを守り、適切に使用するのであれば、小学校高学年から使用してよいことになっています。先日、文章の校正をしてもらいたいと思い、生成AIをお願いをしました。（まあ、自分がPC上で生成AIに文章を校正してと打ち込み、作成した文章データを張り付けたのですが……）すると、びっくり。素晴らしい文章が完成しました。しかも、生成AIは、その文章の言い回しから私の意図を汲み取り、私の努力を労い、さらに2文例も提示してくれたのです。「何を今更」と思う方も多いと思いますが、初めての私には驚きでした。「やるね！生成AIさん」思わず「さん」付けになってしまいました。新しいやり方、新しい時代がやってきていると実感しました。

さて、今年度も皆様のご理解とご協力のおかげで「富大体研だより第42号」を無事に発行することができました。貴重な時間を割いて原稿をお寄せいただいた皆様に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。今号の体研だよりには、新しい時代、若い力の台頭を感じました。そして新たなスタートラインに立つ皆様の晴れやかな笑顔を想像することができました。これからも、体研生の皆様の活躍に大きなエールを送らせていただきます。「体研生熱く！熱魂」（生成AIは使用していません）

(N. T)

訃報

- 令和8年5月29日 富山大学教育学部准教授の神野賢治先生（満44歳）がご逝去されました。
神野先生は社会体育を専門とされ、「まちなかスタジアム」の建設推進や教育実習の指導など、多方面にわたりご尽力されました。
- 令和8年6月16日 富山大学元教授の大川信行先生（満66歳）がご逝去されました。
大川先生は1986年から約40年にわたり、富山大学教育学部、人間発達学部を牽引されておりました。バスケットボールやスポーツ史に携わりながら、附属特別支援学校の校長を務めるなど長きにわたりご活躍されました。

お二方のこれまでのご功績を偲び、心よりご冥福をお祈りいたします。